

特別公開授業

道徳学習指導案

徳島県板野郡板野町板野中学校

3年B組 男子19名 女子18名 計37名

指導者 森 口 健 司

1 主 題 名 生 き る 絆

2 主題設定の理由

(1) ねらいとする価値について

人間としての生き方とは何か。生きることを考えることが極めて少ない現代社会の中にあって、目の前の幸福を追い求め、安易に暮らしていこうとする世俗的な意味での幸福な生き方を求める生徒や大人が多い。しかもなお、人の一生は順風満帆な人生ばかりとは限らない。逆境にさらされたり、不運に遭遇したり、また裏切りや誘惑によって自己の正しさを貫けず、自分の能力の限界を感じ、生きる自信を失うこともある。

こうした中で、人間の弱さや醜さを自覚し、それをばねにして人間の崇高な面である強さや気高さを目指し、だれに対しても人間として温かいまなざしを向けるとともに、相手に対する思いやりや感謝や信頼に支えられた、人を人としていとおしむ心を深め合っていくところに、生きる喜びや幸福があると考えられる。

思いやりとは、単なる同情ではない。相手の立場に身をおき、自己のいたらなさに思いが及んではじめて相手を思いやる心が生じる。この深い自己省察による思いやりや感謝や信頼は、人間として生きる強い心の絆となり、相互に誠実に生きようとするより処になっていく。

主題名「生きる絆」も、人間として生きる絆が、思いやりを土台とし、深い信頼の中から培われていることを理解させたいという切なる願いを込めて設定したものである。

(2) 生徒の実態

社会の風潮も手伝って利己的・自己中心的になりやすく、目先の損得に目を奪われがちな日常の生徒の言動が危惧される。自分が優位に立っていたり、自分に都合のよい状況下では相手を思いやり支え合うことの大切さを理解し実践もしていると思われる。ところが、不利な立場や自分が損失を被る状況下ではどうだろうか。これまでに培った人間関係をよりどころとして自分を偽ることなく、相手を思いやり信じていることができるだろうか。生徒一人一人の人生において、周囲の人々と信じ合って生きる喜びを求めさせたい。そして、その基となる信頼に足る友人関係を積極的に築いていこうとする意欲や態度を養ってもらいたいと願う。

本学級の生徒は、人間としての生き方を考える道徳の授業を通して、一人一人が信頼という固

い絆で結ばれつつある。1学期後半、本校で実施された同和教育研究大会での道徳の授業において、A子が「私は3年生になるまでは、自分が部落出身であることを絶対かくしていかうと思っていました。でも、いろいろな資料を勉強し、みんなの意見を聞いて、その言っていることを本当だと信じたとき、この仲間だったら私の一番つらい思いを打ち明けられることができると思うようになってきました。今、私は二人の友だちに自分が部落出身だということを打ち明けています。まだ二人しか本当の友だちはいないけど、これからはもっとたくさんの本当の仲間を増やしていきたいです。」と語る。

そのA子を支えるかのようにB子が「私もA子さんにそのことを打ち明けてもらったんだけど、自分の一番苦しい部分を打ち明けてくれたんだから、私も心を開いて頑張っていけないかと思うようになってきました。今、まだ二人にしか言えなかったかもしれないけど、もっとクラスの中の人たちがA子さんの気持ちを受けとめて、みんな今の時間を大切にしてほしいと思います。」と語る。

A子やB子の訴えに励まされてC子が「今、3年生でも、何人かの人、自分が部落出身ということ全体学習なんかで言ったんだけど、今、A子さんが二人だけと言ったけど、ここにいる3Bのみんなの前や多くの先生方の前で言えたんだから、信じてくれたと思います。私も部落に生まれたんだけど、恥ずかしいと思ったこと一度も……なかったけど……ほなけど言うて差別されたいやじゃと思わずとさえなかったけど、このクラスの子だったら、信じるができるからこのことが言える。」と語る。

そのC子を支えるかのように、D子が「A子さんとC子さんが言ってくれたけど、これから今日打ち明けたことを後悔するようだったら、私やはいったい今まで何をしてきたんかと思ってくれていいと思います。私も部落ということを使う子を変な目で見ようなんて一つも思うてないし、見たらごっつい自分があほらしいなってくると思います。それで、この前読んだ本で心に残っていることなんだけど、一応世間で言う『親友』とは、親しい友と書いて何でも話し合える友だちということだけど、本当の親友とは、心の友と書いて自分の恥ずかしいところでも、何から何まで端から端まで話し合える友だちを心友というそうです。私もそんな心友をたくさんつくりたいです。」と語る。この授業は共感と連帯の絆に結ばれることの喜びや幸せを生徒一人一人がつかんでいく学習となった。

この授業の翌日の生活記録にE子が「今日の授業、涙を流して自分が部落出身だと語ってくれた友だちがいた。私は友だちが言ったとき、手を挙げるつもりでいたのに、何か友だちの存在が大き過ぎて、その友だちの言葉が思い切り、私の心の中の差別心を刺したような気がした。B子さんやF子さんが『このまま黙って下を向いているより、友だちの気持ちを受け止めて発表して』と言われたとたん、すごい心の中で熱いものを感じました。こんなに涙が出る程、この授業に取り組んだのは初めてです。みんな3Bの仲間を信頼しているからこそ、泣きながら語ってく

れた言葉なのに、今まで下を向いてよそ事を考え、ぶつかってきってくれる友だちにそっぽを向いていた自分が今日すごくはずかしかった。本当に顔から火がでるほどはずかしかった。私は授業の終わりに2回ぐらい手を挙げたんだけど、チャイムが鳴って発表できなかった。でも私は、私なりに今日みんなの前で語ってくれた友だちの言葉を体全体で受け止めたつもりです。最後に私をここまで変えてくれた3Bのみんな、それから先生に何かのきっかけで巡り会えたことを感謝しています。」と記してくる。

仲間を信じ自分をぶつける生徒、仲間の信頼に必死に応えようとする生徒、信頼という固い絆で結ばれつつある生徒たち、その絆をより確かなものにしていき、生徒一人一人が生涯にわたって、互いの存在を生きる支えとしていくことができるような絆とは何かを求め合い、このクラスの結束、絆を永遠のものにしたいと願い本主題を設定した。

(3) 資料について 資料名「ナイン」(井上ひさし)

井上ひさしが「ナイン」の中で示す主題は二つあるように思う。

その第一は、題名にあるように集団としての結束である。この結束は異常なまでに強固である。今風ではない。なぜ彼らは昔風とも思えるこのような結束に固執するのだろうか。

中村さんは「新道少年野球団は強かったねえ」と口癖のように言う。投手英夫の父親ということもあるが、優勝戦延長12回を戦った準優勝であるから大きな価値がある。これはもう父親にとっては誇りのようなものである。しかしその誇りを傷つけるのが当時の主将で四番打者、正太郎の行状である。できるだけ正太郎に触れたくないし、触れても「あいつの名前を聞いただけでめしがまずくなる」のである。確かに、正太郎はチームの中核であり、正太郎抜きに新道少年野球団を語ることはできないだろう。その証拠に口にしたいと言いながら父親はそれまで以上に能弁になる。

正太郎の罪は旧友をだましたということで父親にとっては許し難いものであったにちがいない。しかも弱虫の八番打者の常雄まで正太郎のために自殺未遂を起こしている。

しかし、英夫も常雄も正太郎を訴えることもしないし、訴えるどころか感謝までしている。その気持ちは「おじさんにはわかりません。」とも言っている。このナインの結束は一体何であろうか。

まず考えられるのは、優勝戦をナイン一丸となって延長12回を戦って敗れたことである。勝者よりも敗者の方にドラマがあるというように敗者であったからこそナインの絆も一層大きく強かったのかもしれない。ナインにとってはまさに青春を懸命に生きた証明であったであろう。もちろん正ちゃんが日陰を作ってくれたという恩義もあったであろうし、正ちゃんはそういう存在でなければならなかったのである。しかし正ちゃんが日陰を作ってくれたということは、正ちゃん擁護の大きなきっかけであったかもしれないが、実は表層的、象徴的出来事であったと思える。そのような単に恩義に報いるものだけではなかったのではないか。その検証は井上ひさしの第二の主題に関わってくるように思うのである。

第二の主題は新道商店街への愛着である。「当時の新道には生活があった。」「新道は、ささやかではあるが、しっかりと自給自足しており、そこで小路全体に自信のようなものがみなぎっていた。……なんだかもろい通りになったような気がしてしかたがない。」「客を迎えるだけの、厚化粧だが、何だか素っ気ない小路に化けてしまったこともたしかだ。」という文章からも井上ひさしの並々ならぬ新道への思い入れと愛着が感じられる。もっと考えれば愛着というより愛惜の情さえ感じられるのではないか。

都会にしろ田舎にしろ刻々と変化していく。移ろうは世のならいかもしいが、大切なものまで押し流していく世の移りかわりへの慨嘆がこの作品の主題となっているように思われる。この思いは「新道少年野球団は強かったねえ」という父親の言葉にもある。父親にとっては準優勝にしろ新道少年野球団は強くなければならなかったのである。そしてナインの一人一人の思いも新道少年野球団にある。英夫は中学・高校と野球を続け、高校では西東京大会の決勝まで行ったにもかかわらず、その思いは新道少年野球団に及ばないのは、それが新道という土地ではなかったからであろう。新道には新道独特の土地の匂い、土地の情、もっと言えば新道の伝統や文化があった。それが無残にも打ち壊されていく現代の非情さ、それは大和屋の引越しに象徴される新道のもろさでなかったか。正ちゃんはまさに移ろいゆく新道であった。英夫はじめ新道少年野球団を意識するとしなにかかわらず、そのことを認めるわけにはいかなかったであろう。正ちゃんは新道少年野球団の主将でなくてはならないし、日陰を作ってくれた頼もしい正ちゃんではなくてはならないのである。彼らにとっては新道がどう変わろうと、最も大切で失ってはならないものであっただろう。

「振り返って西を見ると、大会社の大きなビルが野球場に覆いかぶさるように立っていた。この十何年かのうちに、ここには西日が差さなくなってしまったようである。」最後の4行に、作者井上ひさしの新道に対する愛惜の情が客観的に淡々と表現されている。

3 ね ら い

人間には人を人としていとおしむ心があり、その上に立って多くの人と信頼の絆で結ばれている。その固い絆が生きる支えとなっていることを理解し、よりよく生きようとする態度を養う。

<第1時> 変わりゆく新道への愛惜

新道少年野球団に象徴される新道のたくましが失われたことを通して、人間の結び付きの大切さを理解させる。

<第2時> 固い絆で結ばれたナイン

騙されたにもかかわらず、正太郎を許し感謝さえする英夫を通して、固い絆で結ばれた人間の姿について理解させる。

4 指導過程

(1) 第1時の指導

展開の概要	期待する生徒の反応	指導上の留意点
1 あらすじを確認する。		<ul style="list-style-type: none"> 資料内容の事実過程の確認にとどめる。
2 中村さんが新道少年野球団について持っている思いを話し合う。	<p>A 自分自身の誇りでもある。</p> <p>B ナインがばらばらになってしまったことが寂しい。</p> <p>C 頑張り抜いた姿に感動した。生きる喜びを与えてくれた。</p>	<p>A=誇り B=愛惜</p> <p>C=生きがい</p> <ul style="list-style-type: none"> 中村さんの新道少年野球団への愛着とその奥に流れるものに気づかせる。
3 新道にとって、新道少年野球団とはどんな存在であったかを考える。	<p>A 新道そのものであり、当時の新道のようなたくましさがあった。</p> <p>B 新道に暮らす人たちの誇りであった。</p> <p>C 新道に暮らす人たちの生きる支えのようなものであった。</p>	<p>A=象徴 B=誇り</p> <p>C=生きがい</p> <ul style="list-style-type: none"> 新道少年野球団は、かつての新道そのものであったことに気づかせる。 (Aへ収束したい)
4 新道少年野球団に象徴される新道の変化の中で失われつつあるものが何であるかを考える。	<p>A 自信がなくなり、外からやってくる人に頼らなければ生きられなくなった。</p> <p>B とてものにぎやかになり、経済的に豊かになった。</p> <p>C 人と人とのつながりがうすれてきた。</p>	<p>A=精神的貧しさ</p> <p>B=経済的豊かさ</p> <p>C=連帯</p> <ul style="list-style-type: none"> 新道の変化の中で、人々との結び付きまでもが失われつつあることに気づかせる。 (Cへ収束したい)
5 「ここには西日が差さなくなってしまうようだ」という作者の中にはどんな思いがこみ上げてきたかを考える。	<p>A 快適に暮らせることが、かえて人間同志の距離を遠ざけているのではないか。</p> <p>B かつての新道に対するなつかしさと、こんなに変わってしまったという気持ちがこみ上げてきた。</p>	<p>A=連帯 B=愛惜</p> <ul style="list-style-type: none"> かつての新道の中にあっただよさに気づかせる。

(2) 第2時の指導

展開の概要	期待する生徒の反応	指導上の留意点
1 前時の確認をする。		<ul style="list-style-type: none"> •新道の変化を中心に前時の確認をする。
2 陰を作り合いながら、試合を乗り越えた時のナインたちの気持ちについて考える。	<p>A 英夫は陰を作ってくれた正太郎やナインたちへの感謝の気持ちでいっぱいだった。</p> <p>B 支え合う仲間をもてたという誇りがあった。</p> <p>C 自分たちにはできないことはないんだという気持ち。</p> <p>D 本当の友だちなんだ。</p>	<p>A=感謝 B=誇り C=連帯 D=友情</p> <ul style="list-style-type: none"> •正太郎を中心として、ナインが結束していったことを理解させる。 <p>(Cへ収束したい)</p>
3 現在の正太郎についてどう思うかを話し合う。	<p>A 信じてくれる仲間を裏切ることとは許せない。</p> <p>B 家庭の事情が正太郎をゆがめていった。</p> <p>C 人として絶対許せない行為である。</p>	<p>A=連帯 B=寛容 C=正義感</p> <ul style="list-style-type: none"> •正太郎のやったことは、決して許されることではないことを押さえながらAC対Bの対立で話し合わせる。
4 騙されているながら、許すばかりでなく、英夫はなぜ正太郎に感謝するのかを考える。	<p>A 正太郎をいつまでも大切に思っている。</p> <p>B 正太郎を大事な仲間と思って信じている。</p> <p>C 正太郎は英夫の心の支えであったから。</p> <p>D 日陰を作ってくれた正太郎に恩を感じている。</p>	<p>A=友情 B=連帯 C=生きがい D=感謝</p> <p>(Cへ収束したい)</p>
5 「その気持ちは今でも心のどこかに残っていると思います。だから……」という英夫にはどんな思いが込められているのかを考える。	<p>A どんなことがあっても正太郎は正太郎なんだ、ナインにとってはみんなかけがえのない仲間なんだ。</p> <p>B 正太郎を支えとして精一杯生きていきたい。正太郎を否定することは、自分自身の生きる支えを否定することなんだ。</p> <p>C どんなことでも解決できる。</p> <p>D ナインの一人である正太郎を信じたい。</p>	<p>A=連帯 B=生きがい C=自信 D=信頼</p> <ul style="list-style-type: none"> •正太郎との絆を信じ、正太郎に答えようとする英夫の思いが、英夫自身の生きる支えとなっていることに気づかせる。
6 前時の学習と重ねて授業のまとめをする。		<ul style="list-style-type: none"> •生徒の言葉で授業を終える。